不定期刊行　　第413号　2011.09.28

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

ヤズィックアグルの蒼い空 9　つらい別れ

7月25日　朝起きてすぐに山内君のテントを訪ねる。改めて本人より下へ下りますという申告があった。昨夜からロキソニンを飲んでも熱が7度を下回らず、顔のむくみは一層顕著になり、弱気になっている。話をし、励ましながら、なんだかとても切なくなってしまった。しかし、命あればこその登山。もしこのままの状態が続いて手遅れにでもなったら人里から500km離れたこの地では打つ手がない。ヌルさんに大紅柳灘にいるドクターに診てもらえないかと聞いてもそれはだめだとにべもない。今日でポーターによる荷上げが完了する予定なので、彼らに付き添わせて帰るというのがベターな選択である。登攀隊長として、本当に辛い決断の瞬間であった。

ヤズィックアグルを背景に全員で写真を撮った。悲しくて辛くて切なくて、涙がとめどもなく流れた。山内君にとって初めての海外遠征。信高山岳会のメンバーだけでは隊が組めそうもない中、彼の技術や人柄を買って、たっての願いで彼を隊にと迎え入れたのは僕だった。一緒に頂上に立つことを夢に見てきた。「頂上での笑顔をお土産にもってきてください。名古屋には迎えに出ますから。」と言われ、ますます切なくなった。最後に抱き合って別れ、そのままBCを出たあとも涙が止まらなかった。後ろを振り返ることができなかった。

昨日は、山内君の後ろについてゆっくりゆっくり登ったABCには2時間ほどで到着した。毎正時ごとの無線連絡で山内君の様子を聞くと、ヌルさんから処方された中国軍特製の高山病に効くという薬を飲んでだいぶ様子は改善されたとの報に少しほっとする。一方で、14:40にはポーターが220kgの装備・食糧の荷上げをすべて完了した。上部への準備が整った。

こうして山内君が隊を去ることが決定した。隊付きドクターがいない隊であり、BCが人里から遙かに離れた隊である以上、やむを得ないことだ。恐らく僕が同じ立場におかれても同様の決断をしただろう。気持ちがわかる分、絶対に登る、そう自分に誓った一日だった。

7月26日、いよいよ山内君との別れの朝がやってきた。昨日は5000mの高さにも関わらず日中の気温は30度という信じられない暑さであった。しかし、乾燥しているため全く汗ばむという感じがないのは救いである。今日も朝から雲一つなく、暑い一日になりそうだ。無線機の調子が悪く、朝一番の6:00の無線交信ができず、山内君と最後の挨拶もできないまま久根、佐藤、三戸呂の3隊員が上部偵察に向かった。8:00にようやく無線が通じたが、この無線を最後に山内君が山を去った。上部偵察隊は、氷河の陰に入り込むため、山内君とは結局直接無線が通じなかった。

今日はそんなわけで、山内君は下山。松田さんがABCに上がってくる。上部偵察は久根さんにリーダーとなってもらって佐藤、三戸呂の3名があたり、僕は一日休養させ

てもらい、テントキーパーとして上下に分れた隊のサポートに回った。

空がどこまでも蒼く、白く迫力のある氷河を際立たせている。テントキーパーの仕事は突発的な事故がない限り基本的には暇である。唯一の仕事といえば、1 時間に一回の無線連絡をすること。その暇な時間を使って、これから暫く使うことになる ABC の環境を整える仕事をした。まず、ゴミ焼きの炉を作ることにした。しかし、空気が薄いため、穴を掘るのも一苦労。ゆっくりゆっくり身体を動かす。ここはスレート状の石が多いので、50cm ほど掘り込んだ穴の周囲を石で囲むと立派なものとなった。続いて、テントから 50m ほど下にトイレ用の穴を掘る。周囲にはところどころ白い粉が浮き出ているところがあり、なめてみると塩辛い。あとで松田さんがどうもこれはミョウバンのようだと言っていたが、たまたまこの「塩」の脈を掘り当てたらしく、掘っても掘っても白いさらさらの粉が出てきてちょっと感動。

一人でいるとなかなか時間が過ぎていかない。どうしても山内君のことを考えてしまう。しかし、同時に前も向かねばならない。6 人で登る予定のタクティクスを大幅に変えねばならないので、登攀隊長としてその案を練り上げる。これがしっかりとできないと、明日以降上部への荷上げの計画も食料計画も立たないのだ。・・・薄い空気の中でそんなことを考えながら、今日行動している隊員たちが疲れて帰ってきた時のためにと、とっておきのお楽しみ食である「プリン」を作った。氷河の融水で冷やす。ところが天気がよいので、沢はどんどん増水し、流路がかわる。極端な話 15 分に一度は場所を変えないと水没、浸水騒ぎとなる。たかがコッヘル一つのプリンだが、こまめに水の様子をみながら作った。

12:00 少し前に松田さんが到着。ラーメンと海藻サラダでもてなして差し上げようと準備を始めたとき、上部偵察隊から、ちょうど定時連絡が入った。氷河上に出て C1 の目処が立ったとの報告。声は弾んでいる。登頂への第 1 関門だと思っていたセラック帯を抜ける道を開いてくれたのである。その偵察隊は 15:00 に帰ってきた。手塩にかけて育てた我が子「プリン」が大の大人に大好評。

一息ついたところで、5 人となったことを改めてみんなで確認し、変更後のタクティクス案をみんなに提示し、確認する。隊内で確認した後、BC のヌルさんにも伝える。いよいよ明日からは正念場。そんな場面を前にして、夕方から長くお待ちしていた「招かざるお客様」がやってきた。高度障害に伴う頭痛である。想定内のことであり、それほど驚くことはないが、頭が締め付けられるように痛い。食後ロキソニンを飲んで寝た。

C１への荷上げ道　その１

7 月 27 日、日本を出て 12 日目。池工では今日からようやく夏休みがはじまったところ。改めて職場の皆さんや生徒たちの応援、多くの人の援助があっての隊であることを実感する。僕自身はこれまでずっと好調だったが、昨日の夜から頭痛がやってきた。ここを乗り越えなければ登頂はない。さて、今日はずっと休みなしで頑張ってくれた久根さんにテントキーパーをお願いし、残る 4 名で荷上げと C１建設をする。一人あたりの荷上げ量はおよそ 8kg と見積もり、均等に分け、僕は C2 用テント一式と固定ロープ 4 本を担当した。それでもと重量を計ると、登攀具を含めた個人装備が意外と重くザックの総量は 16kg。この高度で、この重さとはと一瞬めげるが、どの隊員もみな条件は同じ。自分らでやらねば、登頂はない以上やるしかないのだ。